希学園 第352回 公開テスト 小3 国語 2021年9月12日実施 【模範解答】 制限時間30分

1

① 新聞

② 行う

③ 強弱

④ 父母

⑤ 点火

2

1 Ⅰ イ Ⅱ エ Ⅲ イ

2 A 狩 B 農 C 動 D 植

3 ウ

4 三

3

1 木／登／り

2 エ

3 Ⅰ ウ Ⅱ オ

4 A オ B ア C イ

5 ウ

6 イ

配点	
1	各2点× 5＝10点
2～3	各5点×18＝90点
	＜計＞100点

受験番号（じゅけんばんごう）	名前（なまえ）	評点（ひょうてん）
		/100

希学園 第352回 公開テスト 小3 国語 2021年9月12日実施 【解説】

1

小学校2年生までに学習した漢字から出題している。①「新聞」は「新」を「親」にしてはいけない。また、「門」のなかを「耳」とせず、最後のよこぼうは右上にはね、右側にはつきださないようにする。②「行う」はほかに「い(く)」「ゆ(く)」「コウ」「ギョウ」と読む。③「強弱」は「弓」の部分を三画で書く。④「父母」は父と母のこと。知っていることばのむずかしい言い方もどんどんおぼえよう。たとえば弟や妹のことを弟妹という。⑤「点火」は火をつける（＝点じる）こと。

2

1 Ⅰ 「いたるところ」は、いくところすべて、どこもかしこも、ということ。

Ⅱ 塩が生活に欠かせなくなった → 塩づくりを仕事にする人が出てきた → そして → 塩はほかの品物と交換される、お金のようなものになった。起こったできごとをならべているのである。

Ⅲ 「さかんな(だ)」は勢いがよいようす。ここは塩づくりを藩の仕事にしたということである。

2 「狩猟生活」だと「塩分を自然に」とることができて、「農耕生活」だと「塩の要求」がふえる、つまり塩が足りないのでほしがるようになるのはどうしてかと考える。大むかしの「狩猟生活」から「農耕生活」に変わったせいで、塩分がじゅうぶんにふくまれている「動物や魚貝類」中心の食事から、塩分があまりふくまれていない「植物性の食べもの」中心の食事になったのである。塩分が不足するせいで、「わざわざ塩をとる」必要が生まれた。

3 指示語の指示内容はあとの述語が決め手になることが多い。「これは～ラテン語のサラリュウムからきたものです」とあった。むかしの「サラリュウム」がいまの何になったのかと考えればよい。

4 「古代ローマ」「中国」「日本」の三つの国の例があげられていた。

3

1 「ぼく＝パンダ」は木からおりようとしている。あとでおかあさんに「じょうずに木登りができるようになった」とほめられている。「練習」ということばもヒントになっている。

2 すぐあとの「おかあさんが泣いている！ どうしたの？ おかあさん、どうして泣いているの？ 何がそんなに悲しいの？ ふしぎでたまらなかった」からきまる。アの「心臓が止まりそうになった」のは理由ではない。「びっくりした」から「心臓が止まりそうになった」のである。ふつうの顔だったのかもしれないので、イの「わらっていなかった」はおどろくほどのことではない。また、「にこにこわらっていると思っていたのに」とあるので、ウの「わらっていた」では正反対の答えになる。

3 Ⅰ 「てっきり」は確かだと思っていた予想・推測が反対の結果となって現れた場合に用いることば。「わらっていると思っていた」おかあさんが泣いていたのであった。

Ⅱ 「木から」「落っこちないで、下までおりることができた」のは「おかあさんがおしえてくれたとおり」「枝の強さをたしかめながら」「おりたから」であった。「ちゃんと」言われたとおりにしたのである。

4 A 「たしかめながら」なので「注意ぶかく」がふさわしい。

B 「じょうずに木登りができるようになった」ぼくの「頭を」「おかあさん」が「なでてくれた」のだから「やさしく」がふさわしい。

C 「ひとりでりっぱに生きていく」のだから「たくましく」がふさわしい。

5 本文はパンダの親子の別れの場面をえがいたものである。ただし母が「子をすてる」のではない。「パンダはみんなそうなのよ」とあるように、それがきまりなのである。アの「病気」やイの「食べものの不足」のことは本文中には全くなかった。

6 「パンダはみんなそうなのよ。パンダはみんな、ひとりで」「生きていくの」とあった。「じょうずに木登りができるようになった」つまり一人前に成長して「ひとりで生きていく」ときがとうとうやってきたのである。いつまでも母といっしょにいて母をたよっていたのでは「りっぱ」な一人前のパンダになれないので、母は朝早くにこっそりすがたを消したのである。

以上